

自動撮影調査から見た東アジアのフライウエイ湿地における陸生哺乳類

安藤元一

東京農大・農・野生動物

冬の日本列島には水鳥が多数飛来するが、こうした渡り鳥が鳥インフルエンザの伝播に関与している可能性が論議されている。感染には渡り鳥だけでなく地域に生息する野生動物が関わっている可能性も想定されるが、渡り中継湿地における陸生動物の状態はほとんど調べられていない。本研究のねらいは日本、韓国、中国、モンゴルを含む東アジアの渡り鳥フライウエイ湿地における陸域哺乳類の生息状況から、1) 各湿地生態系の攪乱程度を解明すること、および2) 水鳥が感染症を伝播している可能性があることから、渡り鳥が媒介しているかもしれない感染症対策への基礎資料を提供することにある。このため2005-2008年にかけて、日本の9湿地（佐潟、福島潟、片野鴨池、琵琶湖、中海、ウトナイ湖、宮島沼、クッチャロ湖、野付半島）、韓国の2湿地（ウポ、加徳島）、中国1湿地（ザーロン湿地）、およびモンゴル1湿地（フブスグル湖畔）の湖岸において、センサーカメラによって陸生哺乳類相を調査した。

各湿地を最低100カメラ日以上調査したところ、場所によって2-9種の哺乳類が確認された。今回の調査で最も高い撮影率が得られたのはモンゴル草原地帯であり、小型哺乳類のナキウサギとジリスが95%を占めた。調査地はへんびな場所にあったが、ウシ、ウマ、ヒト、イヌなども少なからず出現し、ウシの糞と鳥の糞が重なって発見される場合もあった。森林地帯の撮影率は相対的に低かった。中国ザーロン湿地の哺乳類は少なく、中型哺乳類はヤマネコだけであり、大部分は食虫類を含む小哺乳類であった。韓国内陸のウポ湿地の哺乳類種構成は日本の湿地と類似してタヌキが最も多く、ノロジカ、ヤマネコ、イノシシなどのほか、アライグマやヌートリアなどの外来種も認められた。韓国南部海岸ではネコが最も多く出現し、カワウソも撮影された。

日本国内本州の湿地はいずれもタヌキが最も多くを占め、大型獣は出現しなかった。北海道の湿地はキツネの多いことが特徴であり、シカもしばしば出現し、コウモリの多いことも特徴であった。外来種については、日本国内湿地では各地でアライグマが高い撮影頻度を示し、北海道ではミンクの割合も高く、ギンギツネとキタキツネの混血個体も認められた。日本国内湿地の哺乳類多様性は、里山におけるそれと同程度であったが、生息密度については里山より低い傾向が見られた。以上のことから、大陸の草原湿地には小型哺乳類が、日本や韓国内陸湿地には中型哺乳類の多いことが特徴といえる。哺乳類と鳥類との接触機会が多いのはフブスグル湖のような草原型湿地の場合であり、樹林に囲まれた湿地における接触機会は少ないことが知られた。